
絶え間なく注がれる、無償の愛

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶え間なく注がれる、無償の愛

【Nコード】

N4172A

【作者名】

NAO

【あらすじ】

恋人がいる今も、ずっと忘れられない人がいる。僕はその時間と、君からの愛を取り戻したくて、君に一通のメールを送った。何年ぶりの再会は、二人に変化をもたらす。分かれたはずの二人の道が、再び交錯する。

第一話・始まりのメール

君は、驚いていると思う。

こんなメールが来たことについて。そして、差出人が僕であることについて。もしかしたら、そう思っているのは僕だけなのかもしれないが、とにかく僕は君と気軽にやり取りができない。だからといって毎日でもしたいというわけでもない。事実、僕が君に、どんな形であれ連絡をするのは、これが五年振りであるし、君のほうからも同様に五年間、音信途絶だった。しかし、こうしてメールを出してしまうのを考えると、僕は君に対してまだ途切れたくないという思いがあるのだろう。一方で、君がメールアドレスを変更するたびに、僕にアドレスを覚えてくれるのは、僕を忘れていない証拠であるような気がしてならない。一方的な、思い込みかもしれないけれど。

はじめにも言った気軽なやり取りに関してもそうだが、僕は君に会うことも出来ない。それは、君が結婚してしまったからで、今は素敵な夫と、かわいい子供、という周囲もつらやむ家庭の中で綺麗な椅子に座っている。その椅子はきつと籐で出来ていて、君の好きなアンティーク調で、値段も高いのであるう。

僕も君に椅子を買ってあげたことがあった。

それは、付き合ってから最初に来たクリスマスamasのことで、君は、僕のアパートで料理を作って待っていた。日頃から作っていないかつたせいか、料理の味付けは濃かったけれど、そのときの僕の舌はそれを美味しいと感じ取った。僕が帰ってくると、君は玄関から直ぐのキッチンで炒め物をしていて。喜んだ拍子に、君は熱せられた野菜を自分の腕にくつつけてしまって、熱い、熱い、と笑いながら痛みをこらえていた。僕が買ってきた椅子は、安価なものであったけれど、君の体重と、思いを十分支えられる、作りのいいものだった。その椅子は残念なことにあっけなく一週間後に壊れてしまったけれど、

そのときの君の涙は、なぜか嬉しかった。愛されているという確証を得た気がしたからだ。

最近、君がいよいよ昔の君ではなくなっていくような気がして、悲しい。風の便りで、君が結婚をする事を聞いたとき、僕は大人気なく、夫となる男に嫉妬した。君がその男に愛されていることを思うと、頭が割れるように痛かった。いったん考え出すと、どうにもとまらなかつた。速度を上げてしまった車が、急停車できないのと一緒にだ。

君は今幸せなのだろうか。

僕と二人で過ごしていたときのほうが幸せだったのではないか。そして、僕のほうが幸せに出来るのではないか。

夫になる男は、確かにいい大学を出ていて、出世とも縁がある、将来に光のある男かもしれない。社会的に見ても、成功の兆しがあるかもしれない。でも、君はそれでいいのだろうか。君は、自由奔放な人間ではなかつたのか。家庭という束縛、子供という責任、妻という体裁、それらを甘受して生きていくというのか。僕には信じられない。

君はもつと広い大地を走り回っているほうが似合っている。

だから僕は、君が不幸せになつていくようで、耐えられない。

もし君が今の生活に満足し、幸せを感じていてくれるのなら、このメールを読んだ後で、消してしまつてもかまわない。だが、それとは逆で、満足していなかつたり、幸せを感じていなかつたりするようだったら、もう一度会つて欲しい。

君との記念の日に、いつもの場所で待っている。その日は、僕は君が来なくてもそこにいるつもりだ。それで、終わりにしたいと思う。気持ちにも整理を付けたいと思う。

君は、君のしたいようにすればいい。

君は悪くないのだから。

第一話・始まりのメール（後書き）

興味を持たれた方、読んでくださった方ありがとうございます。よろしければ、最後までお付き合いください。ではでは。

第二話・冷めた指輪

「何を考えているの？」

沙紀が、僕の横でささやく。頬杖をして僕のほうを覗き込む。彼女は糸纏わぬ姿で、僕の横に寝転がっていた。

「何も」

僕は、どうでもいいことのように素っ気無く言葉を返した。

「本当にそう？」

沙紀は、僕の胸に指を這わせて、反応を窺ってくる。胸の筋肉を一つ一つ丹念になぞっていく。僕は思わずその指の流れに、鳥肌が立った。

「嘘をついても無駄」

悪戯をする子供のような無邪気な笑みがこぼれる。しなやかな指が、凶器のように見えた。日本刀の切っ先のような、鋭く、それでいて美しい。

沙紀は、身を起こして、僕の胸に口付けをした。纏っていたシャツが彼女の体からするりと滑り落ちる。まるで、水が流れていくように、わずかな衣擦れの音だけが、彼女の背中へと遠のいた。長い褐色の髪の毛が、沙紀の表情を隠した。唇が、トーンの高い音を紡ぎだした。吸い付いた唇が離れる音。沙紀はそれを承知で、わざとそうしているようだった。無邪気さで溢れるが、それはどこか知悉しているようであって怖い。

彼女のしていることは、明らかに技術と呼べるものであり、それはつまり経験の後についてきているものだった。文字通り、沙紀は、それらを身につけてきたのだ。

僕ではない、誰かによって。

無性に脳中を沸騰させるような感情がこみ上げてきた。

濃厚なイメージが僕の頭の中に流れ出てきたからだ。火がついた油にどんどん引火して、僕はどうすることも出来ず、ただもがい

ている。こういう人間の想像力には、ほとんど手が焼ける。手がつけられない。手術をすれば、部品を取り替えれば済むというレベルのものではない。それ自体を停止させなければならぬ、危機的なレベルでのみ、それは僕の中から排除される。

嫉妬は、人間である証明である。

「ねえ、真司」

唇を離れた沙紀が、僕を上目づかいに見つめた。どこか瞳が潤いを発しているようだった。何かをねだるようなくさに見えた。甘え、頬をすり寄せる猫のようだった。

「私では不服？」

僕は瞬間的に首を横に振っていた。それが少し大きかったのが、余計彼女の失望の糸を引いたようだった。

沙紀は、少し大きな溜息をついた。

「真司。あなた、最近少し変よ。心ここにあらず、って感じ。私とこうしている間にも、あなたは全く別のことを考えている」

沙紀は、何も言わない僕の顔に自らの顔を接近させて、瞳の奥を探る。沙紀の、長い睫毛が反り返っているのが僕からはよく分かった。額に張り付いた一本の髪の毛が、先ほど抱いたときの余韻を漂わせていた。沙紀の甘酸っぱい体臭が、僕の嗅覚を支配した。決して嫌な匂いというわけではないが、その匂いを肺いっぱい満たすと、僕はなぜか吐き気をもよおした。

「…帰るわ、私」

つまらなそうに、僕の上からベッドに腰掛ける体勢に移行した。

うつすらと光の反射した背中越しに、沙紀は僕をにらみつけた。僕は上体を起こし、片膝をたたんで、彼女を見つめた。視線が沙紀の視線と重なる前に、沙紀は立ち上がった。腰の括れから、臀部のふくらみ、足へと続くラインが、今の僕には何の色気も感じられなかった。床に落ちた下着を拾い上げ、背中を向けながら着る。そこからは、早くこの場所から去りたいという焦慮がひしひしと伝わってきた。その証拠に、なかなか引つかからないブラジャーのホックに

癩癩を起こし、もう、と少し鋭い声を上げていた。

やがて、デニムのミニスカートと、Tシャツが彼女を包み終える。

沙紀は、一言、

「さよなら」

と言った。

いつもの沙紀の足音よりは若干高めで、玄関へ向かう。僕は、その沙紀の背中に向かって言った。

「…指輪を忘れてる」

沙紀は足を止め、僕を振り返った。

沙紀は、何か言いかけたが、喉から言葉は精製されず、息だけが漏れ出したようで、沙紀自身も逡巡しているように僕からは窺えた。沙紀は、僕の手から指輪をむしりとっていった。

「このころの真司が、好きだった」

そのときの沙紀の表情は、悔恨そのものだった。あれほどの顔をした沙紀は後にも先にも見たことはなかった。

言うまでもなく、彼女の閉めたドアは壊れそうなほどの大声を上げた。

僕は、急に静けさを取り戻した部屋で、ただ一人溜息をついた。

先ほど沙紀がこぼしたそれと同じか、それ以上の溜息だった。溜息に色があるのならば、きつと僕の溜息は黒かっただろう。すさんでいる、という言葉で片付けるのが一番正しい。それだけ、僕は人間的にも崩壊しかかっているのだった。そして、それを僕自身も認めざるをえないのだった。

沙紀と同じ指輪が、僕の薬指で、鈍く、光っている。

第二話・冷めた指輪（後書き）

第二話です。興味を持ってくださった方、読んでくださった方ありますが、ありがとうございます。よろしければ、もう少しお付き合いくださいませ。ではでは。

第三話・指輪について

沙紀と僕が、どうして付き合うことになったのか、今でも分からない。沙紀は、派手な女だと思う。露出の高い服を嗜好し、化粧品は少し濃く、スタイルはいい。そのせいだろうか、男関係も多彩だった。一度、沙紀に聞いたことがあった。

「沙紀、今までどれぐらいの人と付き合ったことがある？」

沙紀は、おもむろに指折り始め、最後には両手ではすまなくなっていました。

「分からない。思い出せないわ」

あっけらかんとした顔で笑って見せる沙紀に対して、僕はただただ呆れていた。僕の顔色を読み取ったのか、沙紀は僕の腕に自分の腕を力強く絡めると、首筋に頭を摺り寄せてきた。

「でも、今は真司が一番好き」

沙紀が、僕にいったい何を求めたのかは分からない。

僕は、大声で言えるような取り柄などもっていないし、あまつさえ金や、名声もない。ただ、人間として当たり前前の心身があるだけだった。

沙紀を好きになったことはない。彼女が一方的に僕を好きになった。

気付けば僕のアパートにいたし、気付けば僕のベッドの中に、僕の腕の中にいた。僕は、選択すらしていなかった。彼女は何かを選択したのかもしれないが、それは僕にとっては無意味なことだ。僕が選択をしていないのだから、それは恋人が持っている愛情とはなれない。だが、彼女は僕を恋人だと思っているし、当然のように僕との関係を求めてくる。そうされればされるほどに、僕は彼女のことをどこかで好きになりかけていたのかもしれないが、決定的な愛は、そこには見当たらなかった。確信がもてなかった。

過剰な自信を持っているように思うかもしれないが、沙紀は僕の

ことを好きなのだと思う。

僕の体に口付けをしていく様や、硬くなったそれを愛しそうに口に運ぶさまを見ているとそう思えて仕方がない。僕が、恍惚に身を染め、発声することを彼女自身の喜びにしているようだった。そのときの彼女の顔は、本当に嬉しそうだった。行為の後、僕の腕を枕にしているときも、彼女の手は必ずもう片方の手で、僕の手を強く握っていた。その強さは彼女が眠りについてても、緩むことはなかった。沙紀の細い寝息を耳にしながら、僕は、ふと沙紀の寝顔を覗くするとそこには、至福の表情が映し出されていた。

なんて幸せそうなのだろう。

僕は急に嫌気がさしてきて、彼女の頬をつねる。それは、沙紀に対する嫉妬なのだろうか。沙紀の温かい頬が僕の指に潰されると、彼女は、低いうめき声を上げて目を覚ました。細く開けた目で、僕の指を見る。そして、その指が自分の頬をつねっていると知るや、沙紀はやはり嬉しそうに僕の頬をつねり返すのだった。

誰かに愛されていると知ることほど、つらいことはなかった。

僕にとって沙紀との付き合いはそうだった。

僕が愛しているのは別の誰かであると、自分自身で明瞭に理解していたから、ことさら胸の奥が重く、やるせなくなっていた。

自分勝手な行動に。返すことの出来ない無責任な愛に。

沙紀が、僕を愛してくれていると見る度、聞く度、感じる度に、僕は胸が痛んだ。本来愛されることは幸福なはずなのに、僕は心底喜ぶことが出来ないでいた。幸福に浸ることが出来ないでいた。

もし、別れることになっても、僕は心痛を病むことにはならないと思う。

そんな一方的に注がれる愛を、僕は今、沙紀から受け取っている。誰よりも幸福なはずなのに、僕はそれを手ですくった水のように、扱っている。いつか、沙紀の愛は枯渇してしまうだろう。

炎はいつか必ず灰になるものだ。どんな大恋愛も、いつかは終わる。

沙紀との関係も、もう下火になりつつある。ひんやりと冷たい指輪の質感が、それを如実に物語っている。指輪に託した思いを、僕はもう忘れてしまった。二人、指輪を手にしたときの感情はもう戻ってこない。今では、恋人であるというささやかな証でしかなく、一度外せば、もはや他人であるような気さえする。もはや、ただの飾りでしかないのであろう。

だが、沙紀はまだ指輪を持っている。

第三話・指輪について（後書き）

興味を持っていたいただいた方、読んでいただいた方、ありがとうございます。
残りの二話です。できれば最後までお付き合いいただけます。
よう、よろしくお願いします。では。

第四話・幸せに思えた時間

指輪は、沙紀と僕が去年のクリスマスに買ったものである。二人でその日、宝石店に行った。有名な宝石店で、値段などとても僕の懐ではまかないきれないものばかりが、整然と陳列されていた。僕の予算よりも、ゼロが一つも二つものばかりだった。内心で僕は沙紀に冷や冷やしていたが、特に何も言うことが出来ずに、沙紀の香水の匂いを追っていた。僕を和ませるはずの柑橘系の甘い香りが、そのときばかりは鼻をつく臭いに感じられて仕方がなかった。突然、沙紀は、ショーケースの中の、ある指輪を指差し、驚くべきことを口にした。

「すみません。これ、はめてみてもいいですか」

僕は、どこからか鋭い視線を感じた気がした。それは、嬉々満面として指輪をはめる沙紀ではなく、ショーケースを空けた店員のものであった。表面上は笑顔を装っているが、内心では、そんな金を持っているのか、という疑心が、眉間のしわに色濃く込められていたような気がした。

僕は、努めて冷静を装って沙紀のはめた指輪を眺めていた。似合っていないわけではないが、沙紀にしてはとも仰々しく、なおかつ巨大な宝石が薬指の上で異彩を放つ。僕はそのとき、細い枝になっっている熟し切った柿を頭に描いた。

「ねえ、真司」

沙紀が突然振り向いたので、僕は思わずたじろいってしまった。

「これにしようか」

僕は一瞬その言葉の意味を理解できなかった。沙紀の口調といったら、まるで今日のおかずを作るのが面倒になって冷凍食品を買うような、そんな軽い衝動買いのような雰囲気存分に充滿させていた。もちろん僕自身は、冷凍食品を買うつもりも、その指輪如何に返答する気力もなかった。

だが、店員に背中を向けた格好で僕を見つめていた沙紀は、唐突に僕に対してウインクをした。目に異物が入ったわけではなさそうだった。しきりにウインクするさまは、もちろんふざけているようでもない。

そして、僕は、そこであることに気付き、沙紀の考えを理解した。「それでいいんじゃないか」

沙紀はウインクをやめて、少々ほっとしたようだった。目尻が日常のそれより緩んでいる。

「そうね、これにしようかな」

沙紀のその言葉を聞いた店員は、僕たちに何かを感じ取ったのか、より一層愛想を浮かべ出した。僕をどこかの金持ちの息子と勘違いしたのかもしれない。とすれば、沙紀は、僕の婚約者といった役どころだろうか。

僕たち二人の間に、不思議な空気が流れ出した。

一度自分をそういった役どころにおいてしまうと、どこか心情に落ち着きを取り戻し、逆に泰然とした心持になってきた。

「沙紀、そのネックレスもいいんじゃないか」

「そうね、でも少し大袈裟すぎないかしら。首が疲れそうだから」

店員は、その言葉に僕たちが相当な裕福な男女に見えたらしく、しきりに商品を薦めだした。慇懃に商品を取り出し、僕らの眼前に差し出すそれは、まるで、高官に仕える侍従のようなものであった。「このネックレスなんか清楚な感じで、私は好き」

沙紀から清楚という言葉が飛び出すとは思わなかったから、僕は沙紀に隠れて含み笑いをした。

不思議な空気は、まだ二人の間を流れていた。

暖かく、それでいて少し湿っている。動けば直ぐにでもじんわりと汗をかきそうな、そんな熱帯夜のような。

それに例えをつけるなら、子供のころに母親に連れていってもらった祭りの空気によく似ていた。普段は車道になっている細い道が、いつせいに遮断される。そして、両端には出店が並び、夜の帳に大

きな火が点される。提灯であつたり、電球であつたり、大小さまざま。僕は母の細いが、柔らかく、温かい手に連れられて、大勢のいきれに吞まれるようにして二人で並んで歩く。当時の僕は落ち着きがなかったから、直ぐに迷子になつては泣き叫んでいた。それを知っていた母は、無邪気に踊る僕の手を固く握り締めて離さなかつた。

僕は、くじ引きが大好きだつた。

大人の判断力があればだまされることのない代物だが、子供心には、そう、夢をこの手で今にもつかめそうな、そんな期待と羨望が込められた代物に見える。一等から十等まで高価な商品が並んでいたが、いつになつてもそれは誰にも当たることはない。

それでも僕は、いつかはそのくじが当たる気がして、母の手を引いた。母は何も言わずに僕の手を百円玉を握らせてくれた。

そのときの母が、どうして外れると分かつていて、僕にくじを引かせてくれたのか。

僕は、それが分かつた気がした。

そのときの空気が、今この宝石店の中で流れ始めているのは、おそらくは沙紀の背中を見る僕が、そのときの母に近かつたからだ。当たりや、外れなんかない。すべて本物しか並ばないこの高級な店内で、僕はそのレトロな童心をくすぐるような感情の流れを、敏感に感じ取っていた。

宝石店を出た僕たちは、入るときと全く同じだつた。ただ違つていたのは、店員の視線の鋭さだつた。金持ちの息子とその恋人を演じる必要がなくなった僕たち二人は、まるで大漁の漁師が港に帰港してくるときのように、意気揚々と店を出てきた。店員は、狸に化かされ悔しがって、齒軋りしていたようだつた。僕は心の中で、店員に謝罪したが、それは心底からではなかつた。

「沙紀が今まで付き合ってきた男って、どんな男だつたんだ」

僕は、なぜか余裕があった。だが、聞きたいことでもあった。普段の僕であつたなら、きつと嫉妬してしまうようなことであつたけれども、そのときは僕の懐がとて広く、かつての沙紀のどの恋人よりも自分が上回っているような気がしてならなかった。そんな不毛な自信がさつきの宝石店で萌芽してきた。

「何でそんなこと聞くの」

沙紀は、不思議そうに僕を見た。

「聞きたいからさ」

やはり、僕には余裕があつた。すんなりと喉から出たのが、言った僕自身にも不思議だつた。

「そうね……」

沙紀は道の先を眺めるように考えた後、思い出したように口を開いた。それは、鶯が春の訪れを叫ぶように清澄としていたが、内容はそれとは別だつた。

「初恋の人は散々だつたな。中学のときに付き合っていた人なんだけれど、あ、同じ学校の先輩で、私から告白したの。そのときって、なんと言うか、恋に恋してしまう年頃でしょう。恋は魔法なのよ。一度好きになつてしまうと、その男の人がすぐ格好よく見えてしまう。それで、こう、猪突猛進と言うか、そんなところ。それで、告白したその日のうちに家に来いって言われて、私が何の疑いもなく彼と一緒にいていたら、その日のうちにいきなり初体験。なんか、中学のときに想像していた酸いも甘いもが、一気にどこかへ飛んでいっちゃつたって感じ。とにかく自分勝手な人で、私が痛いって言うのに聞かないで、そういうことするし……」

胸に、何かが引火したようだつた。余裕だと思えた大勢が、沙紀の現実に簡単に揺らいだ。僕以外の誰かに沙紀が抱かれていた、ということとは、付き合い始めた当初から分かつていたことではあつた。でも、それはなぜか、僕の中で簡略的に扱われており、その重要性においても軽視しすぎていたことでもあつた。現実から少なからず目を背けていたということであろう。ただ、それは僕自身、まだ沙

紀という女性について把握し切れていない漠然とした部分が、実は僕の心底で大きな不安や嫉妬を呼ぶことになる気がして、また、それが現実の僕に心痛をもたらすような気がしてならなかったからであくまでも自身の未成熟な心のせいには他ならなかった。

男は、妄想の動物である。

見知らぬ誰かの裸を妄想して勃起することがある。女性の胸のふくらみや、露出の度合いで、簡単に局部を熱く、硬くすることが出来る。僕は、見知らぬ男に抱かれている沙紀を想像することで、嫉妬の炎をいとも簡単に燃え上がらせることが出来る。そして、その想像によって勃起してしまっている僕自身に、罪悪感と、嫌悪感を募らせる。付き合う、という解釈そのものに欠陥があるとしか思えない。付き合うことは、互いを補完することであるというのが、持論だった。だが、それは、僕の思い込みと、誇大な理想像に過ぎなかったと言える。

互いを補完しあうこと。それは、たとえばこうだ。仕事をする男性と、家事をする女性。そういう、得手不得手を補って完全なる家庭を築く。ジェンダーの要素は関係ない。とにかく、互いが互いを支えあうことが付き合うということであると思っていた。

沙紀は、それを根底から揺るがす。

僕が、沙紀の過去に嫉妬することは、僕の持論にはさほど関係のないことのように思える。しかし、僕が沙紀と補完しあうには、足りないものがあまりにも多すぎた。沙紀は、僕ただ一人、という唯一の意識を持ち合わせてはいない。つまり、沙紀は僕を補完対象としてみていないということだ。たとえ見ていたとしても、それは僕ただ一人というわけではない。沙紀には、今でも男の影が見え隠れする。おそらくは、今でも別の男との交流が絶えていない。それどころか、日ごとに増していつている。携帯電話のアドレス帳を隠れて開いてみたところ、件数は百件をゆうに越えていた。沙紀は、様々な男性に様々なものを求めていたようだった。それはお金だったり、移動手段だったり、話し相手だったり、遊び相手だったり、性

交渉の相手だったり、きつと多種多様に違いなかった。ただ僕は
その中で、簡単にいえば恋人という枠組みを得た男に過ぎなかった。
そう、思ってしまうだけの根拠があった。だが、僕は甘受すること
で以前の恋を忘却の淵底に沈めようとしていた。それは、自分に都
合の良いほうに解釈すれば、失恋で出来た大きな穴を、沙紀との恋
で埋めようとした、となる。もちろんこれは持論に合致しているし、
筋書き通りならば付け入る隙さえない出来だった。だが、それは誰
から見ても隙だらけで、完璧には程遠いものだった。

「でもね、痛いわりには、不思議と血は出なかったのよ」

沙紀の苦笑いが、僕の耳を不快の波で侵食した。自分で臨んだ話
であるのに、今度は自分で拒否したがつているのが分かった。

沙紀は、まるでそれが他愛のない昔話であるかのように話し出し
た。沙紀にとつて、それは本当に他愛のない昔話なのだろう。昔の
失敗談を笑い話にする程度の。だが、僕にとつては、それはことの
ほか重大で、聞くに堪えない話だった。

「しかも、下手で」

様々な時、場所で、沙紀が何を考え、何を思っているのか、僕に
は分からない。

「相手も初めてだったし」

何を感じ、何に向かうのか、僕には見当すらつかない。

「私と付き合ったのだから、ただしたかっただけらしいの」
僕は、どうしたらいいのか分からない。

恋の終わりを予感して、恋の中に身を横たえることは、病床に付
し、ただ死を待つ患者に似ているような気がする。自分自身が傷つ
かないことを前提に恋をすることは、快感はあっても、充実はない。
それでも、その恋は楽で、終わりを予感することがつらくない。状
態としては、最高であるのかもしれない。使い捨てのコップのよう
なもの。コップ一杯の水を飲み干すためだけに使用されれば、後は
廃棄されるだけ。飽きれば、飲み干す前に捨ててしまえばよい。

「最初は、少しぐらい優しくするものでしょ、普通。真司はどうだ

ったの」

ひとつのコップを捨てた後は、また違う水の入ったコップを探し始める。しかし中には、かつての味を忘れられずに、苦渋する人がいるのかもしれない。

僕はどんな水を飲んだのか。それはどんな味で、どれぐらいの量だったのか。すでに飲み干してしまったのか、まだ残っているのか。「ねえ、聞いてる」

自分で踏み込んだ沙紀の領域で、これほど自分が苛立つとは思わなかった。胸の奥が焼けるように熱くなり、破壊の衝動がこみ上げるのがわかる。自業自得だが、僕にはそれが許せなかった。包み隠そうともしない沙紀の物言いが、今の僕の苛立ちを立ち上げたのだ。「もう、いいよ」

「あ、嫉妬」

沙紀が、下から覗き込むようにして僕を窺う。それが、僕を見下しているように、馬鹿にしているように見え、聞こえた。

「聞きたくないんだ。そんな話」

僕は明らかに不快感を顔に出して、ぶっきらぼうに言った。

「聞いた俺が間違いだった」

沙紀は、立ち止まったようだった。当然の反応だ。第三者から見れば、沙紀は明らかに悪くないのだから、沙紀が怒るのも無理はない。そうであっても、そうであると分かっているだけでも、僕は心無い言葉を放つ口を持っているのだ。制御することのできない、矛盾した心を持っているのだ。

僕はしばらく歩いてきた。振り向いてはいけないような気がした。振り向いてはいけない、そんな強迫観念があった。意地、という言葉が二、三度浮かんでは消えた。沙紀にとっては、男は僕だけではない。僕が恋人という役割をもらっているだけに過ぎない。沙紀は、僕に愛想を付かして、今から別の男にでも会いに行けばいい。沙紀ほどの女性ならば、誰でも優しく慰めてくれるだろう。本心はどうあるにせよ、優しい言葉をかけてくれるだろう。たくましい腕で抱

き寄せてくれるだろう。大きな手で頭をなでてくれるだろう。それが、僕である必要がない。

しかし、なぜ、こんなにも胸が苦しいのだろう。なぜ……。僕の頭に、念仏のようなシユプレヒコールが流れた。

「真司」

真司。

何か別の言葉のように聞こえた。そして、それは特殊な呪文のように聞こえた。

「真司」

僕は、かけられるはずのない言葉をかけられている心地がした。

気づくのが遅れ、振り向くのはもっと遅れた。

沙紀が、すぐ後ろにいた。

僕は、急に胸が熱くなり、まるで何かにすぎるように、その場で沙紀を抱きしめてしまった。彼女を正面から抱きしめ、首を引き寄せる。沙紀は、最初こそ驚いたようだったが、直ぐに平静を取り戻し、僕の後頭部を優しく撫で始めた。

「よしよし」

いつしか得ることのなくなった、安心感と充足感が、そこに優しさと同化して存在していた。

子供の頃に、暗く長い夜道を一人で歩いた記憶。闇が手を伸ばして、僕の背中を執拗に押した夜。振り向くことがどれほど恐怖だったか。家までの距離がこれほど長かったか。僕は愕然とし、また、後悔した。昼夜で逆転する僕の勇氣。その勇氣が、いかにちっぽけで役に立たないことを知った夜。

そして、あの光に感動した夜。

我が家の光を道の先に見つけたときの心境。ちっぽけだった勇氣が、どんどん膨らんでいく。疲労が、脆弱した心が、再生されていく。家路につき、玄関をくぐったときのあの素晴らしき感動。それは、母の胸に飛び込み、その服にしみこんだ匂いを嗅ぎ取ることによって容易に爆発した。

涙だった。温もりだった。安心感だった。

母は言った。胸に飛び込んで咽び泣く僕の後頭部を愛撫しながら。
よしよし。

触れられるたびに涙がとめどなく流れた。糸の切れた人形のように。緊張の糸が切れた僕は、溜め込んでいた恐怖を振り払うかのよう
うに泣き続けた。滂沱が綴る物語。僕が強がりながら話せば、母は
微笑みながら聞いてくれた。小さな、とても小さな英雄譚が、そこ
にあった。

僕よりも確実に小さな体を持っている沙紀のどこに、これほどま
での包容力が存在しているのだろう。海の中に落ちていく感覚。い
や、夢だろうか。とてつもなく大きくて安らかな何かの中にゆっく
りと落ちていく。体中を癒すように浸透してくる。僕は、母の足を
思い出した。子供の頃に感じた手の大きさを思った。布団一つに二
つの温もりがあった。摺り寄せた頬の先には、母の小ぶりな乳房が
あり、その柔らかさは、吸い付きたくなるような愛おしさに満ちて
いた。

沙紀の髪からは、柑橘系の匂いが漂う。だが、その奥に沙紀自身
の甘酸っぱい匂いが見え隠れしていた。僕はそれを嗅ぎ分けるよう
に鼻を動かした。鼻腔の奥につんとくる匂いは、汗の匂いのような、
母乳の匂いのような、懐かしさにまぶたを閉じたくなるものだった。
閉じたまぶたの奥に風景が広がって、僕は飛び出していきたくなる。
終わる夏の公園で、時間を忘れたようにはしゃぐ子供。傾く夕日に
輪郭を彩られて、遠くから帰宅を促す声。オレンジ色の向こうで、
細い腕を大きく振って、知らせに来る。白いエプロンが映える。

ご飯よ。早く帰ってらっしゃい。

僕は公園を出る。母の元へ駆け寄っていく。白くて暖かい、家事
で汚れた手に僕は一日の終わりを感ずる。エプロンに染み付いた夕
食の匂いに、食卓を想像する。家路までのほんの数分を、母と手を
つないで話しながら帰る。僕は、ホームランを打った。フェンスを
越える大きなホームラン。小さな公園の大きなホームラン。母は、

まるで自分のことのように嬉しがっていた。優しい目尻が、もっと優しくなる瞬間。

僕が、いつまでもここにいたいと切実に望むも、帰らざるを得ない現実。その風景をまぶたに描写しながら、僕は遠き過去の美酒に酔う。だが飲めども飲めども深くは酔えず、まぶたの先に存在する現実に醒めてしまう。過去は閉じたまぶたの奥にしか存在しない。

そして開けたまぶたの先には、沙紀がいた。

そのときの、何も聞かずただ優しく抱きとめてくれる沙紀の存在がどれほど大きかったことだろう。僕が必要としていたのは、体裁だけの恋人ではなく、欲求を満たせる穴としての恋人ではなく、ただ傍にいて、肩を貸してくれるような拠所としての恋人だった。

沙紀が僕に対してどのようなものを求めているかは分からない。けれど、僕が沙紀に対して求めているものは分かった気がした。全部ではないにしろ、氷山の一角だけはこの手のひらの上で形として見えている。鮮明に。

僕は、ゆっくりと懐から、沙紀を解き放った。沙紀は、そっと微笑を浮かべて、僕を見つめた。

「好き」

沙紀の声は、明瞭で疑う余地がないものだった。思考する間隙すら要しなかったようだった。僕を好きだと言うことに、沙紀自身疑っていない。沙紀がなぜ僕を好きでいるのか。僕を好きでいられるのか。僕には絶対に見つけられない回答を、沙紀は確実に持っている。自分で発見できないがゆえに、僕は不安になる。僕が確固たる自信の持てる長所を持していれば、その不安は払拭されるかもしれない。ところが、それを持っていないとなると、話は全く違うところに進んでしまう。不安が更なる不安をつれてくる、いわゆる疑心暗鬼に陥ってしまう。

分からないなら、沙紀に聞けばいいのではないか。

「沙紀…」

沙紀は、長いまつ毛を開き、僕を瞳の正面で捕らえた。

友達に苛められ泣きじやくる僕を優しく介抱してくれた母の瞳に似ていた。心に思ったことを一言一句余さず吐露したくなってくる。胸を締め付けられる清らかな衝撃。この衝撃は、僕に更なる涙を催させ、配色の違う落涙が頬に伝う。悲涙から、感涙へ。この世でただ一人、そのサイクルを劇的に実行できるのは、母だけだった。

僕は躊躇していた。

沙紀が、先程僕に、好き、と言ってくれたように、僕の問いかけにすぐさま応じてくれるだろうか。見つからず、眉間にしわを寄せ、沙紀を僕は見たくはない。沙紀が、僕を好きでいることが幻想の賜物だとすれば、沙紀にかかった魔法は一瞬で解けるだろうし、僕の醜態は白日の下に呆気なく晒されるだろう。絶望に落胆し、瞳の色を暗澹に曇らせる沙紀の表情が脳裏にいくつもモニタージュされる。その流れをもつてして、僕の喉は、言葉が喉から溢れ出るのを阻止しなければならなかった。

まるで、毒の混じった水をそうするかのように。

沙紀は、待っていた。僕の問いかけを待っていた。

だから、残念そうに少し溜息をついた沙紀の肩は、少なからず常時より落ちていた。

僕は、何かを逸したことを悟った。

「真司、こつち。これ見て」

膝を曲げて、露店に並べられたアクセサリーを手に取る。僕は、逸した機会を取り戻そうという思考したが、そんな方法は見つかるはずがない。沙紀の丸めた背中から透けて見える、ブラジャーのホックが、なぜかとても遠方であるような錯覚に陥った。そして、そのホックを外すことが、終わりの始まりを予感させるようで悲しかった。

「沙紀なら似合うんじゃないかな」

結局、未来の二人よりも、現実の二人を選択してしまったのだ。

「私に似合ってたって仕方がないのよ。二人に似合わなきゃ、ね」

結局、未来の不安よりも、現実の享楽を選択してしまったのだ。

沙紀の横、同じ体勢で座った僕に、愛らしい声調が届けられる。

「これなんか、真司に似合いそう」

そう言っつて、沙紀はおもむろに指輪を僕の左手の薬指にはめた。

「どんな感じ？」

正直、不思議な感じだった。指輪そのものに感慨を覚えたのではなかった。指輪のある箇所には僕は感慨を覚えたのだった。

左手の薬指。

熟考も無く沙紀はその指に指輪をはめた。その事実が、少しの間、僕の感情を静止させた。

その指輪は、複雑な模様の入った銀の指輪で、太陽の光に眩しく輝いていた。しいて例えるならば高波が打ち寄せる様を掘り込んである作り。

「ほら、どうかな」

沙紀は、自らの左手の薬指にも指輪をはめて、僕の左手の横に並べた。

無骨な指。手の甲には血管が浮き出っていて、骨の筋がはっきりとかがえる。まるで峻険な山脈を想像させる。肌は少し浅黒く、子供の頃につけた火傷の痕が親指に痛々しい。爪は深爪で、平べったい。ささくれが中指にあつて、手を洗うとしみて痛い。

繊細な指。手の甲には青白く細い血管がうっすらと伸びていて、骨が緩やかに浮き出ている。雪を被ったアルプスのなだらかな尾根を想像させる。肌はシーツのように白く、それでいて内に通った血の赤さでほのかに赤い。爪は細長で、澄み切った空のよう。空にかざせば青空と見紛う色が配されている。ささくれのない、家事労働のない、完璧な指。

二人の手は、確かに違つて見えた。同じ手には見えなかった。

しかし、互いの指には同じ指輪が、煌々と輝いていて、僕には同じ手が二つあるように見えた。共有しているように見えた。

「真司これにしよう」

僕は、その刹那、記憶の奥底に隠れていた、ある感情と笑顔を思い

出した。忘れることのできない、一人の女性の微笑を。
二つの指、二つの指輪。それは、思い起こさせた。

第四話・幸せに思えた時間（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。次回が最終回です。最後までお付き合いいただけましたら幸いです。ではでは。

最終話・無償の愛

「おめでとつ」

練習するように繰り返し発音してみた。

僕は、ガラスの向こうに広がる交差点を眺めていた。駅前から程なく歩いたところにあるビルの二階。カフェは全面ガラス張りで、外を眺めるには絶好の開放感だった。眼下を歩いていく人々を眺めながら、僕は彼女を探していた。

十年という月日は経ってみればあまりにも足早だった。足重に通ったこのカフェも、今ではすっかり様変わりして、十年前の面影はすっかりない。それでも、目を細くして探せば、過去の傷跡のようなものがほんの少しだけ残花のように残っていた。

僕は、数分前にアイスコーヒーを注文した。

コースターの上には、汗を纏ったアイスコーヒーがあり、溶けてバランスを崩した氷が、店内に清澄に響いた。ピアノの音のように、風鈴の音のように。

使い果たしたはずのミルクのプラスチック容器から、白い液体がこぼれていた。めくれたふたにも同様の白い液体が付着していた。僕は、ガラスのテーブルからこぼれたミルクを手でふき取り、舌で舐め取った。ほんのりと甘い感覚が、口の中に薄く広がった。不意に、僕は何を思ったのか、横に重ねてあるナプキンを取り出して、テーブルを拭き、ミルクの容器をテーブルが汚れないように別のナプキンの上に置いた。行為自体に意味があつたわけではなかった。だが、僕は突然それをしなくてはいけないような気がした。テーブルの上を汚してはいけないような気がした。

そして、また外を眺めた。

僕の左手の薬指には、指輪が鈍い光を湛えている。外を眺めつつ、僕はその指輪を回したり、外したり、またはめたり、そんな落ち着きのない所作を繰り返していた。

僕は、指輪を右手の薬指にはめかえた。

彼女を待つ間、僕はいろいろなことを思い出していた。事前儀式のような、スタートラインに立つ前の心の準備のような感覚で。

氷が、またバランスを崩した。

「久しぶりね、真司」

外の景色を見ていた僕の後頭部に、声が届いた。

「十年ぶりかしら」

そう言いながら、彼女は、僕の向かいの席に音もなく座った。僕は、顔を上げるのを少々戸惑いながら、アイスコーヒーの汗から、彼女の顔へと、視線を上昇させた。

本音を言えば、僕は彼女の顔を見る度胸がなかった。十年の歳月は、自分が意識しているよりも長く、そして膨大な辛苦の賜物だった。苦労は、感情に小波を呼び、小波は表情に波浪をもたらす。波風に荒らされた表情は、その砂浜に大きな傷跡を残してしまう。その残滓がしわとなり目尻や、額に刻まれる。それは、年端を重ねた証拠であり、肌が水を弾かなくなっていく前兆であり、鏡を見るたびに憂鬱になっていく日々の始まりである。

僕は、思い出のアルバムをめくるたび、写真に切り取られた若々しい姿を瞳に宿してきた。そこに写った彼女は何年の月日を経ても若く、そして、弾けるような笑顔を僕に送り続けてきた。映画『マイ・フェア・レディ』で今も尚輝く、オードリー・ヘプバーンのあのつづらな瞳と、唇の稜線が永遠にあのままであるように、僕の中で彼女はあのと時のまま輝いている。しかし、今ではどうだろう。過去を追想し続けてきた僕にとって、今の彼女を正面から見据えることは出来るのだろうか。もしも、現在の彼女を直視して、僕の心に一部でも後悔や、落胆することがあったとしたら、僕はあの手紙で書いたことを信じる事が出来なくなってしまう。

そう鑑みるとあの手紙の行き先は、現在の彼女ではなく、十年前の彼女に送った手紙だったのかもしれない。

「今日、家を抜けてここへ来るの、大変だったのよ。強引な理由を

作って飛び出してしまったけれど」

僕は、そつと彼女の面影を現在の彼女になぞった。

「やだ、あんまりじろじろ見ないで。恥ずかしいじゃない」

照れ笑いをした彼女は、確かに年輪と呼ばれるものを感じさせた。

だが、僕は、脳を揺さぶられるような衝撃に襲われた。それは、一瞬のうちに過去の幻想を破砕してしまうほどの、果てしなく深い衝撃だった。

一本の若い梢は、それ自体では木陰は作れない。しかし、年を経た太い梢は、そこにはつきりと影を作ることが出来る。影の下で、動物が休み、人間が涼をとる。誰かを優しく癒し、愛し包むことが出来る。

彼女が持っていたのは、まさしくそれだった。

淡雪のように刹那的に輝く笑顔ではなく、月のように当たり前のように存在し周囲を明るく穏やかに照らしてくれる笑顔。まさしく、母の持つ慈愛のような、それでいて包容力を持った笑顔だった。

僕はそこで初めて彼女に対し口を開いた。

「変わったね」

彼女は、微笑した。それは遠い過去を眺めるようで、少し悲哀に満ちていた。

「あなたもね」

小悪魔のような囁きだった。

「でも」

彼女は続けた。ウエイターが届けてくれた水を口に運んでからの言葉だった。

「あなたは、十年前に比べれば、ずいぶん大人になったわ。中身は分からないけれど」

僕を値踏みするようになってから、微笑む。

「もういい歳の大人に向かって、そういう言葉もないんじゃないかな」

「ふふ、そうね」

僕が飲み干したアイスコーヒーを下げる際に、彼女はコーヒーを注文していた。おしぼりで手を拭いている彼女の手を不意に見下ろせば、台所用洗剤に負けてかさかさに荒れた両手が、痛々しそうに、夕陽の赤のようにそこにあった。

「慣れてないのよ」

僕の視線に気がついた彼女は恥ずかしそうに僕の死角へ手を隠した。

「いや、もっと見たい」

僕は、自分でも驚くくらい大胆に彼女の手をつかみ、僕の目の前に引き出した。彼女の手をつかんだ感触は、えもいわれぬほどの快感だった。いや、快感ではなかったらう。全身に駆け抜けた歓喜は、僕を震え上がらせると同時に、現実の衣をなくした過去へと剥落させた。

まるで自分が今、彼女と付き合っているような錯覚。恋人同士でいるような心地が漂った。

しかし、僕はその夢心地が、左手の薬指を見た瞬間に脆くも瓦解してゆくのを、はつきりと理解した。

「見ないで」

それは拒否だった。彼女の抵抗は、手を見られたことではなく、別の何かに対してであるように見えた。たとえば、左手の薬指にある刻印に対して。たとえば、今の自分に対して。

「本当に…結婚したんだね」

その僕の言葉は彼女に何を思わせたのか。まぶたを閉じた彼女がその瞳を僕の前に晒すまでにしばしの時間が経過した。

ゆっくりと息を吐き出した彼女は、僕の手を逆に握り返した。溜息だったのか、決意の息だったのか、息はまもなく空気中に混ざり合い、僕は判別できなくなった。

「結婚したわ」

おめでとう。

僕はその言葉が喉から出なかった。

「今では、立派な母親よ。考えられないでしょう。十年前なんて、こんなことは考えても、一笑のうちに終わっていたことですもの」
僕は、何も言わず頷いた。

「そうだ、見て」

彼女は、バッグから携帯電話を取り出して、僕に見せた。液晶に映っていたのは、カメラ付携帯電話で撮られた、一人の赤ん坊だった。

「男の子よ、かわいいでしょう」

太い腕の中ですよすやと安眠する赤ん坊の写真。赤ん坊を抱きかかえているのは、夫だろうか。そう、息子の父親だ。

「確かに、君に似たからかな」

心なしか僕の声は震えていた。彼女は、僕の顔をちらりと見て、微笑んだ。

「生後六ヶ月なのよ。子育ての苦しさで楽しさが身に染みてきたわ」
言いつつ、彼女は携帯電話の液晶に映し出された赤ん坊をうつとりとした表情で見つめる。

僕は言葉を失っていた。

彼女は、もう立派な母親の顔をしていた。家事などまったく不得手だった彼女が、必死に家事に取り組んでいる。子供が、ピーマンが嫌いだと言ったら、ハンバーグに刻んで入れるのだろう。玩具屋で駄々をこねだしたら、きつと我慢を覚えさせるために、叱るのだろう。幼稚園には、彼女が送迎するのだろうか。それとも、バスがそうするのだろうか。授業参観では、きつとドキドキしながら我が子が黒板に解答を書くのを見守るのだろう。

「真司は…今でもこう呼んでいいのかしら」

「かまわないよ」

「真司は、今何をしているの？」

彼女は、僕の返答を待つ間に、先ほど注文していたコーヒーを口に含んだ。ミルクは入れなかった。

「クローク」

「クロークってホテルの？」

「そう。あんまり大きなホテルじゃないけれど、経営は安定しているし、給料も悪くはないよ」

彼女は、僕の現在を満足そうに眺めているようだった。それが、なぜか母親が子供を見ているように感じられて不快だった。

「付き合っている人はいるの？」

僕は、彼女を睥睨した。右手にはめかえた指輪の感触が鬱陶しく感じられた。

「僕は、君しか考えられなかった。十年前に君を失ってから今まで、思い続けてきた。君のことを考えずに生活していても、不意に思い出してしまう。突然昔の思い出がよみがえってくる。その瞬間、胸が震える。泣きたいほど、痛いほど、分かる。まだ君のことが……」

「分かっているわ」

「分かっていたのならなぜ」

僕は、思わず席を立ちそうになる勢いを何とか堪えた。握り締められた両手の拳はわななき、今すぐにも何かを叩き壊してやりたかった。この抑えがたき破壊の衝動は、十年前から堆積してきた彼女への思いの裏返しだった。

「そうしなければ」

彼女の目が強烈な光を放った。

「真司は、子供のままよ」

僕は、浮いた腰を椅子にどっかりと落ち着かせた。

「私は、真司を愛していた。今の夫も愛している。でもそれは、真司を失った結果に過ぎないわ。時は流れているし、過去は過去のまま。現在への糧とはなりえても、現在には成り得ないわ」

「…愛していた」

僕は、生気の抜けたような声でそう紡いだ。

「ええ、真司を愛していた。その気持ちは絶対に偽りではない。ここに確かにあつたんですもの」

彼女は胸を押さえた。

「でも、真司は子供だった。付き合い始めた最初こそ、甘えられているということが恋愛の一手段、一方法に思えたけれど、年月を経てこう思ったの」

体が動かなかった。金縛りにあったようだった。

「私は真司にとって母のような存在ではないかって。真司は私を恋人と思っけていても、私から見ればあなたはまるで子供のような存在にしが見えなかった。私を支えようとするのではなく、何か、真司は、無償の愛を受け取ろうとしているように見えただわ」

彼女は間を置こうとはしなかった。この十年間にためていたものを一気に爆発させているような様相を呈していた。僕と付き合っている当時、彼女の心の中にはワインの澱のように、不満が蓄積されていったに違いない。

「つまり、真司は、母親が子供に注ぐような、受け入れるだけの愛を渴望していたのよ」

喉もとに鋭利な刃を突きつけられたようだった。僕が白装束を着た罪人で、彼女が僕の首を落とす介錯人のように見えた。

「無償の愛。そう。これだけ明瞭で、完璧な言葉はない」

「僕は、君を愛していた」

「分かっている、分かっているわ。私があなを愛した気持ちは嘘ではないし、いまさらそれを後悔する気持ちもない。あの日々は、私にとって輝かしい日々だった。真司に抱かれたときの声は演技ではないわ。私は、心で、身体で感じていた。それは、真司がくれた恍惚よ」

目尻のしわから滲み出してきたのは、過去の遺物だった。それは、長い年月を経て干からび、風化した悲哀そのものだった。砂漠に乱舞する砂のように、彼女の目尻から落下していた。

もしかしたら、彼女の目尻にあるしわは、僕が作ったものかもしれない。なかった。

「母親になって……」

悲しみの谷底へ、声は自由落下していった。悲しみの深度の分だ

け。

「やっと気付いたのよ。今更になって。本当に今更。なぜあのときに気付かなかったんだろうって。ぼんやりとは分かっているけど、それを真司に伝えることは出来なかった。言葉に出来なかったから。私の勘違いだと早合点したから」

彼女は、深く、とても深く溜息をついた。

「…きつと二人とも子供だったのね」

僕は、何も言えずに呆然としていた。

新しい感情が、螺旋状になって上ってくるのを感じた。胸を突くような苦痛を伴った、やり切れない、とても重い、感情。

彼女は、何かに笑いかけるようにそつとつぶやいた。

「真司」

僕は、耳をそばだてる。

「真司よ。この子の名前」

携帯電話に映し出された赤ん坊が、僕を見ている。

「なぜ」

「それしか思い浮かばなかったのよ。生まれた瞬間、霞む景色の中で我が子を腕に抱いたとき、私は思わず、真司、って呼んだの。真司。私の真司」

僕は、どうしようもなく、悲しくなった。

「どうして、そんなことをしたの。僕は、ここにいるのに」

「きつと、今でも愛しているのね。まだ、真司とは本当の恋愛をしていない気がするの」

彼女は、コーヒーで満たされたカップを目線の高さまで上げた。

黒い液体が波打つ。

「このコーヒーにミルクを入れて飲んでいたのよ。甘い…とても甘美な、恋。本当は、苦いものでもあるのに…」

カップを置いた衝撃でコーヒーが揺れる。コーヒーは縁から飛び出そうと右に左に揺れていたが、しばらくして収まった。

そして、彼女はそのコーヒーを僕に差し出した。

「お互い、惹かれあうのはもう止めにしましょう。こんなつらい生き方をなぜ私たちは選んでしまったの。お互い、もう十分年をとったわ」

「…」

「真司…ひとつだけいいかしら」

僕は彼女の瞳を見つめた。十年前の彼女が、そこにいるように見えた。十年前の彼女の弾けるような、太陽のような笑顔が、僕の脳裏に満ちていく。若さに頼り切った、十年前の彼女は、とても美しくかった。

しかし、僕は、十年後の彼女に本当の美しさを見出した。

衰えてくるはずの美貌を、保とうとする姿勢。昔は、何もせずとも美しかった。それは、若かったから。年を経た今では、そうはいかない。衰えて然り。なのに、彼女はより綺麗であった。美を求め姿勢にこそ、本当の美があると僕は気付き、卓越した技術と経験に裏打ちされた彼女に舌を巻く。この十年の間、どれほどの男に愛され、どれほど男のために美しくなろうと尽力したのだろうか。その動機付けにより、彼女はここまで美しくなってきたのだ。

彼女は唇を動かす前に、まず、コーヒーカップを僕の方へさらに寄せ、その脇にミルクを置いた。

「このコーヒーを飲んで欲しいの」

彼女の口紅が、コーヒーカップの縁に薄く残っていた。

僕は、ただコーヒーだけを目の前にして座っていた。

「このコーヒーを飲んで欲しい…か」

ガラスの外を眺めると、雑踏に吞まれていく彼女が見えた。質素な服を着てはいるが、僕の視線は確実に彼女を一瞬で捕らえた。振り向かない彼女の背中を僕はずっと眺めながら、コーヒーのカップに手をかけた。

波紋の広がる黒い液体の上で、僕の顔が揺れていた。そこに映し

出された僕の顔は、明らかに十年前より大人びていた。大人びてはいた。

僕は、唇をそっとカップにつけ、口内に液体をほんの少し流し込んだ。途端、苦味が口の中に広がっていき、僕は思わずむせてしまった。

「苦い」

僕は、カップの脇に転がっているミルクを見ながら言った。そのミルクは開封されておらず、だからといって使う気も起きなかった。「でも、悪くはない　な」

彼女の姿はもうどこにもなかった。

僕は、残りのコーヒーを、彼女の口紅が付いている場所で飲んだ。彼女の口紅とコーヒーが混ざり合った味は、僕の気持ちを落ち着かせる。

十年間、僕が求め続けたものが何だったか。

それは、この苦味だったのかもしれない。そう、思えた。

店を出、僕は、先ほどまで恋人のように二人で座っていたテーブルを見上げた。ちょうどウェイターがテーブルの上を拭いているところだった。

もはや、二人が座っていた形跡は残っていなかった。そして、またそこにウェイターに案内された客が座る。二十歳ぐらいの男女。二人は、まるで恋人のようだった。

《終わり》

最終話・無償の愛（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。今回で最終回になります。母親の愛情を少しでも思い出しただけなら満足です。作者もこの執筆を終えた直後に当時付き合っていた恋人と別れたわけですが……。その点では思い出深い小説です（笑）最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4172a/>

絶え間なく注がれる、無償の愛

2010年10月8日15時11分発行